

# George Peele 序論——Peele と Essex

佐藤 達郎

## I

1588/9 年、George Peele (1556–1596) の *A Farewell* と題する詩が、London で出版された。タイトル・ページに “To the most famous Generalles of our English forces by Land and Sea, Sir John Norris and Sir Francis Drake Knightes” と付されているように、この詩は、ポルトガル遠征に赴く、Francis Drake と John Norris に対する送別を告げたもので、同時期の Peele の作品に顕著な愛国主義的高揚感に溢れている。この Drake と Norris のポルトガル遠征は、ポルトガル Crato の行政長官 Dom Antonio を王座に据え、イングランドがポルトガルを敵国スペインの支配から解放するという目的をもっていた。*A Farewell* が出版されるおよそ 1 年前、Peele は *The Battle of Alcazar* を執筆し大衆劇場にデビューを果たしているが、イングランドによるポルトガルの解放という主題を扱ったこの芝居でも、イングランドの軍人 Tom Stukeley の造形に、Peele の反スペイン主義的傾向が色濃く反映されている。

この Elizabethan jingoism と anti-Spanish sentiment が横溢した *A Farewell* には、作者 Peele 自身による次のような序文が付されている。

Your virtues famed by your fortunes, / and fortunes renowned by  
your ver- / tues (thyrc honorable Generalles) to- / gether with the  
admiration the worlde/hath worthily conceived of your woor- / thines:  
have at this time encouraged mee, a man not / unknowne to many of  
your brave and forward follow- / ers, Captaynes and Souldiers, to send

my short farewell / to our English forces. (1-8) (下線部筆者)

この序文自体は、「Drake と Norris のたぐいまれな美德と名声が、この詩を執筆するきっかけをあたえてくれた」といった、何の変哲もない cliché から成り立っているが、ここで注目したいのは、Peele が自らを “a man not / unknowne to many of your brave and forward follo- / ers, Captaynes and souldiers” と称する一節である。David H. Horne はこの一節から、作者 Peele 自身が、既に何らかの形で、軍人として大陸への遠征に参加していた可能性を示唆している (100)。“man not / unknowne to ...” という—恐らくはこれも cliché と受け取られかねない—表現から、Peele 自身が軍人であったという類推をひきだすのは、牽強附会の謗りをまぬがれないが、この推論が決して不自然ではないのは、Horne 自身も指摘しているように (1)、Mary Gates という女性が、“soldier” である George Peele という人物と結婚していた (2)、Peele なるものが Robert Carey 率いる Normandy への遠征軍に参加していた、という別の記録が存在するからである (Horne 99-100)。

Peele が軍人として大陸遠征に参加していた可能性を、さらに裏付けてくれるのは、1580 年後半より Peele が陥っていた経済的状況である。Christ Church の Clerk であり、複式簿記の教員を務めていた James Peele の長男として Christ Hospital で少年時代を過ごした Peele は、1572 年 Oxford 大学の Christ Church に入学した。Oxford で自らの文学的才能を開花させた Peele は、やがて Oxonian と呼ばれる文人たち、William Gager、Thomas Watson、Thomas Acheley、そして恐らくは John Lyly と深い関わりをもつようになり (Horne 66-9)、この Oxford での創作活動と人脈の結実が、宮廷エンターテインメント *Arraignment of Paris* (1584) であった。エリザベス一世を讃えるこの宮廷エンターテインメントの上演は、中産階級の典型ともいえる Peele の生涯でもっとも華々しい瞬間であったが、何らかの理由で宮廷エンターテインメントを手がけることを断

念せざる得なくなった彼は、以後職業作家として、絶えずパトロンを捜し求める不安定な生活状況に追い込まれていった。Horne は、この Peele の逼迫の理由として、夫を経済的に支援していた妻の死 (1587) を挙げているが、少なくとも、この時期 Balgay なる人物から Peele が多額の借金をしていることから、彼が 1587 年頃から矢継ぎ早に大衆演劇を執筆しはじめた動機はあきらかであろう (81-3)。

エリザベス朝の時代、Peele のように宮廷での活動の断念を余儀なくされた者にとって、大陸への軍事行動に参加することは、経済的不安を解消する手段のひとつであった。1585 年のオランダ遠征の際 *Leicester* 伯に率いられた軍隊が(この遠征には、Peele が *A Farewell* をささげた John Norris も参加していた)、*Leicester* の臣下たちに加えて、必ずしも軍事的訓練を受けていない罪人や失業者 “masterless men” から成り立っていたことを考えると (Adams 182-3)、この時期 Peele が軍隊に一時的な経済的庇護を求めていたこと可能性は決して少なくないのである。

## II

George Peele が、大陸への軍事行動とりわけ Robert Carey 率いる Normandy への遠征軍に参加していたという推論が極めて興味深いのは、この可能性が、劇作家 Peele と Essex 伯 Robert Devereux との深いつながりを連想させてくれるからである。そもそも、*A Farewell* の主題となった Drake と Norris のポルトガル遠征や、Carey のノルマンディー遠征は、当時宮廷で絶大な権力を誇った Essex 主導による軍事政策の一環であった。この 1580 年代中葉からおおよそ 10 年にわたる Essex の軍事行動とエリザベス朝政権の関わりについては、Paul E. J. Hammer による極めて詳細な分析がなされているので、ここでは Hammer の論に依拠しながら、Essex の軍事行動と Peele の創作活動の関連について考えてみたい。

継父 *Leicester* の大陸における軍事強硬路線を継承した Essex が思い描いていたのは、フランスのアンリ四世と同盟を結び、敵国スペインを打破

することで、イングランド主導による汎ヨーロッパ的プロテスタント国家を建設するという壮大な計画であった (Hammer 260-1)。しかしながら、この Essex の “Protestant Cause” という理想は、軍事費に対する懸念など現実路線をとる Elizabeth とのさまざまな軋轢をうみだし、エリザベス朝政府の根幹を揺るがすきっかけともなっていた。とりわけ Elizabeth による Rouen 撤退の命令に対する Essex の拒否や、Elizabeth の意向を無視した兵士たちへの knighthood の授与といった彼の単独行動は、ときに Elizabeth 自身の権力の低下を露呈させるという危険な因子をはらんでいた (220-3)。

このような要素を内包した Essex の軍事行動が、エリザベス朝の宮廷という過度の競争社会から脱落した、反政府的分子のよりどころになっていったとしてもけっして不思議なことでない。Essex の軍隊構成は、宮廷、地方(主として Essex の影響下にあった Staffordshire, Herefordshire, the marches of Wales, Carmarthenshire, Pembrokeshire など)あるいは Devereux 家からの人脈に依拠していたが、Leicester にくらべて支持母体が貧弱だった Essex がさらに頼ったのは、必ずしも恒久的な主従関係を持たない “followers” と呼ばれる志願兵たちであった (291)。この “followers” には、Essex の “Protestant Cause” を信奉するものとともに、新天地で名誉の回復と経済的支援を求める宮廷での失職者たちも含まれていた (210-20)。Peele が Normandy への遠征軍に参加していたことが事実であるならば、恐らく彼は後者に属していたであろう。

このように、現政権に対する不満分子を内包した、いわば “Essex’s Men” ともいうべき集団が、Elizabeth という政治上の中心点から離れた場所で、次第に形成されつつあったことは注目すべきことである。事実、この時期 Essex にとって最大の関心のひとつは、この集団を宮廷の内外に拡大していくことであった。この点、80 年代後半からさまざまな形で行われた Essex の自己宣伝——自画像の作成、Essex 主導によるエンターテインメント、政治的文書の回覧——は、自らの public image の質と量

を高め、大陸遠征の正当性を広く大衆に標榜しようとする、軍事上の方策の一環であったといえよう (144–7, 208, 338–9)。

このような Essex の自己宣伝のなかでもとりわけ興味深いのは、彼の秘書 Henry Watton によって執筆された *The State of Christendom* の回覧 (1595) であろう。この Watton の manuscript は、Antonio Perez の *Pedaços de historia ô relações* で論じられた政治上の問題について議論するという体裁をとり、彼の主人 Essex の主義信条を支持したものと考えられるが、ここで重要なことは、Watton が、Elizabeth 批判の理論的根拠ともいえるべき “limited monarchy” 「制限された王権」の概念に対して賛同の態度をとっていることであろう (315, 338–9)。“in violating the latter [the laws of nature], they [princes] remember not their maker on earth; for the people and peers of the realm are their makers next onto God” (qtd in Hammer 338). (自然の法を犯す時、君子は自らがその作り手ではないことを覚えておくべきである、というのも神に準じた王国の人民・貴族こそがその作り手なのだから。) この Watton の一節は、Essex の軍事上のデモンストレーションが、Elizabeth 政権に対する異議申し立ての意図を含んでいたことを示す好例といえるであろう。

### III

1580 年代の後半、宮廷詩人の道を断念した Peele は、強硬な軍事路線を鼓舞する Essex をパトロンとすることを願っていった。この Essex のグループへの Peele の参与は、Essex の軍事路線を支持する *A Farewell* の執筆や Peele 自身の大陸遠征の可能性に加えて、Peele が、1589 年 Essex のポルトガル遠征からの帰還を祝う牧歌 *An Eclogue Gratulatory. Entitled: To the Right Honorable, and Renowned Shepherd of Albion's Arcadia* を執筆していることからあきらかであろう。この牧歌は、羊飼いの Piers が、“great shepherd of the field” (122) である Essex の永遠の名声を謳う (“to royalize his fame”) という設定になっているが (131)、ここで確認したい

のは、次の一節にみられるように、この詩が単なる Essex の讃歌にとどまらず、宮廷における Essex の軍事路線に対する批判を視野にいれながら、その Essex 路線の正当性を絶えず擁護しているという点である。“But woe is me lewd lad, fame’s full of lies, / Envy doth aye true honour’s deeds despise; / Yet chivalry will mount with glorious wings, / Spite all, and nestle near the seat of kings” (108–11).

さらに Peele は、当時の Essex にとって最も重要な行事であった Accession Day entertainment の様子を、*Anglorum Feriae* (1595) で再現しているが、このエンターテインメントの目的は、イングランド国内における彼の勢力を誇示するとともに、大陸での軍事行動に消極的な Elizabeth I への批判を提示することであった (Hammer 394)。言い換えれば、Peele にとって、Essex をパトロンに願うことは、Elizabeth 政治への批判の場に身を投ずることであった。それは、約 10 年前、宮廷上演の *Arraignment of Paris* (1584) で、Elizabeth I の礼賛を謳った彼にとっては 180 度の転換であったのである。

#### IV

For the other part, the manner of your petition I do well like of and take in good part, because that it is simple and containeth no limitation of place or person. If it had been otherwise, I must needs have misliked it very much and thought it in you a very great presumption, being unfitting and altogether unmeet for you to require them that may command, or those to appoint whose parts are to desire, or such to bind and limit whose duties are to obey, or to take upon you to draw my love to your liking or frame my will to your fantasies. (Marcus 57) (下線部筆者)

上記の引用は、1558 年、Elizabeth I が彼女の結婚を要請する議会に対して、行った名高いスピーチの一節である。ここで Elizabeth は、国王の意思を制限し (“bind and limit”)、思いのままにあやつろうとする (“frame

my will to your fantasies”) 臣下たちの傍若無人のふるまいに言及しているが、まさにこの女王に対する男性臣下の “male fantasies”こそが、エリザベス朝のエンターテインメントの源泉であった。Leicester 主催の *The Princely Pleasures at Kenilworth Castle* (1575) に代表されるように、1560、70 年代のエンターテインメントにおいて、この男性臣下の “male fantasies” は、「Elizabeth に対する結婚の要請」という主題で表現されたが (Montrose 447)、1580 年代初頭、Elizabeth の結婚問題が終結すると、その “fantasies” は、Essex の Accession Day entertainment にみられるように、軍事路線に消極的な “female queen” に対する反発に、その表現をみだしていった。この “male fantasies” と Elizabeth の対立が、当時支配的だったイデオロギーすなわち「女性が国王であることへの反発」によって一層強められていったことは、1598 年 Essex がフランス公使にあてた次の手紙の一節からもあきらかであろう。“they labored under two things at this court, delay and inconstancy, which proceeded chiefly from the sex of the Queen” (De Maisse 115). 「この宮廷で人々は、二つのこと、すなわち遅延ときまぐれに四苦八苦しています。これも主として、国王が女性であることに由来しているのです。」1580 年代中葉から 90 年代にかけて、Essex をはじめとする不満分子たちが共有していた “weak queen” という認識は、この Elizabeth の “female queen” としての弱さが、不確定な世継ぎという政治的身体の弱さと結びつくことによって生じた当時の政治的風土の所産であったのである。

さらに興味深いことは、このような政治的風土が、Peele の大衆劇 *The Love of King David and Fair Bethsabe* (以下 *David and Bethabe*) における David の造形と密接に関連しているという点である。旧約聖書の The Second Book of Samuel を材源とした *David and Bethabe* (1594 年頃の執筆と推定) は、David の Bethabe 強奪と Absalom の反乱というテーマを扱っているが、冒頭のプロローグでは、この劇の主題が次のように提示されている。“Of Israels sweetest singer now I sing, / His holy stile and happie

victories” (1–2). しかしながら、注目すべきことは、この劇の進行が、このプロローグで示された「David の神々しい威容と凱旋」いう主題自体を拒否し、David の王としての適性への疑念がことさらに強調されているということであろう。この David への懐疑的態度は、劇の前半において、自分の臣下を殺害するようにしむけ、その妻 Bethabe を強奪した David の “lust,” “sin,” “passion” を描くことで強調され、後半では、その疑念は、自らに対して反乱を犯した息子 Absalom を許し、肉親の情のため王としての職務を忘れた David の造形に色濃く反映されている。いいかえれば、作者 Peele は、前半において、David の「自然的身体の欠陥」 (“lust”) を、後半においては、彼の「政治的身体の欠陥」を描くことで、「王の二つの身体の弱体性」を明確に示しているのである。さらにいえば、劇の前半において提示された David の “lust” は、単に David 個人の統御できない情念を示すのではなく、後半で強調される彼の「統御できない政治的身体」を予告するという比喩的な役割を果たしているといえるだろう。

このような劇の前半において予告された David の政治的身体の脆弱性が、もっとも鮮明に描かれているのが、Absalom の死を嘆く David を臣下 Joab が諫める終幕の場面である。Frederick G. Fleay が、この劇に、Elizabeth / David、Absalom / Mary Queen of Scots という政治的アレゴリーを読み取ったように (153–4)、この場面は、Mary Queen of Scots の処刑の報告を聞いた際の Elizabeth の嘆きを彷彿とさせるが、このように国体よりも affection を優先させる David に対する臣下 Joab の言葉は、David の政体に対する疑念、すなわち “limited monarchy” 「制限された王権」の概念を提示している点で極めて重要である。

What, irks it David, that he victor breathes,  
That Juda and the fields of Israel  
Should cleanse their faces from their children's blood?  
What, art thou weary of thy royal rule?

-----



I'll lead thine armies to another king  
Shall cheer them for their princely chivalry,  
And not sit daunted, frowning in the dark, (1859–1862, 1881–3)  
(下線部筆者)

もし政治的身体を統御できないのであれば、軍隊を引き連れ他の王のところに赴くというこの Joab の台詞は、前述の “What, art thou weary of thy royal rule?” という一節とともに、David の王としての適格性に疑問をつきつけた言葉であるが、恐らくこの場面を描く作者 Peele の意図は、“limited monarchy” の概念——すなわち「自然の法を犯す時、君子は自らがその作り手ではないことを覚えておくべきである、というのも神に準じた王国の人民・貴族こそがその作り手なのだから」という論拠——を提示することで、“weak queen” / Elizabeth の政治的弱体を観客に想起させることではなかったか。宮廷詩人の道を断念し、やがて Essex の軍事強硬路線に身を投じた Peele が、貴族主催のエンターテインメントや献呈詩ではなく、*David and Bethab* という大衆演劇において、エリザベス批判を暗示させたことは極めて興味深い。そして、この David の描写は、*David and Bethab* の執筆からおよそ 1 年後、“weak king” を主題とし、その王は彼女自身だ Elizabeth に言わしめた、Shakespeare の Richard II の造形に受け継がれていくのである。

#### 引用文献

- Adams, Simon. “A Puritan Crusade? The Composition of the Earl of Leicester’s Expedition to the Netherlands, 1585–86.” *Leicester and the Court: Essays on Elizabethan Politics*. Manchester: Manchester UP, 2002. 176–95.
- Fleay, Frederick G. *A Biographical Chronicle of the English Drama 1559–1642*. Vol. 2. London: Reeves and Turner, 1891. 153–54.
- De Maisse, [Andre Hurault, seigneur de]. *A Journal of All That Was Accomplished By Monsieur De Maisse Ambassador in England from King Henry IV to Queen Elizabeth Anno Domini 1597*. Eds. G. B. Harrison and R. A. Jones. London: Nonesuch P.
- Hammer, Paul. E. J. *The Polarisation of Elizabethan Politics: The Political Career of Robert Devereux, 2nd Earl of Essex, 1585–1597*. Cambridge: Cambridge UP, 1999.

- Horne, David. H. "The Life of George Peele" *The Life and Works of George Peele*. Ed. Charles Tyler Prouty. Vol. 1. New Haven: Yale UP. 3–146.
- Marcus, Leah S., Janel Mueller and Mary Beth Rose, eds. *Elizabeth I: Collected Works*. Chicago: U of Chicago P, 2000.
- Montrose, Louis Adrian. "Gifts and Reasons: The Context of Peele's *Araygnement of Paris*." *ELH* 47. 3 (1980): 433–61.
- Peele, George. *The Life and Works of George Peele*. Ed. Charles Tyler Prouty. 3 vols. New Haven: Yale UP. 1952–70.